

インシュレーターには 職人達の情熱が込められている

インシュレーターとは機器を振動から守るもの。制振する、浮かせる、あるいは逃がすなど、広い意味では振動をコントロールするアイテムだが、コントロールの仕方はさまざま。そして人が作るものである以上、ブランドごとにインシュレーター職人と呼ばれる音の達人が存在する。そこにスポットを当て、筆者が特に興味をもつ職人さんをピックアップしよう。制振といえば、TAOCだろう。

近ごろは、整振にシフトしているようだが、鑄鉄を活かした振動のスペシャリストとしての地位を築いてきた。大きな会社だが、開発の岩田博さんは、ラックやボードを含めた振動系アイテムの音決めを担当。キーワードは高解像度とアナログ感だ。機器の微振動を狙い、いかに吸収、遮断するのか、オーディオドックに研究を積み重ねている。採用するコンポメーターが多いのも信頼の証だ。

ローゼンクランツの貝崎静雄さんは、一匹狼のインシュレーター職人だ。セッティングのノウハウはカリスマ的で、全国を行脚している。基本は金属のスパイク形式

だが、「歯と歯茎」という独自の理論で、2ピース型のインシュレーターを開発。人の歯は硬いものや柔らかいもの、何でも噛める仕組みである。そこからハンダをクッションにする原理を考案したわけだ。スパイクの角度や方向性にこだわり、矢印をマークしているのは唯一同社のみ。音の狙いはタイミングや瞬発力を重視。具体的には位相合わせで、動物や運動選手のようにどんな音(信号)にも反応するアイテムを追求しているのだ。

スパイクではクライナのDプロップシリーズもユニークな発想である。近畿大学の西村教授と故・伊奈龍慶さんによる共同開発で、学会発表レベル。金属のスパイク(2段と1段がある)とカップを一体化した構造で、内部に特殊溶液を封入。二重のフィルターで振動を効果的に減衰、消滅させる仕組みだ。ポリシーに掲げる3次元の「ホログラフィックサウンド」は、インシュレーターをはじめ、スタンドやケーブルにも生かされている。

オーディオリプラスは、一貫して石英ガラスを追求している。振動の伝達スピード、すなわち処理スピードが早く高S/Nなことが同社製品の特徴だが、篠隆市さんが凄いの、表面を鏡のように磨

きあげたHRシリーズやHG HRシリーズ、さらに最高峰のGR・SSシリーズまで高めたことだ。振動は表面を伝わるという物性が根拠だが、きわめて高硬度なため加工は困難。マテリアルとしての魅力が篠さんを突き動かしているのだ。

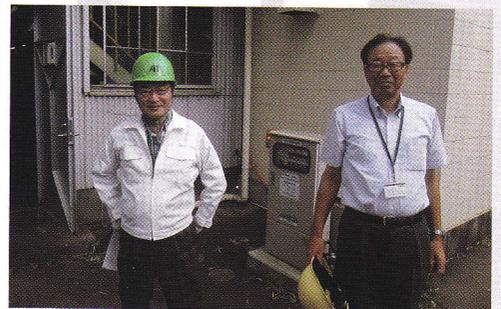
KaNaDeは新登場のブランドだ。小林満さんは元自動車用摩擦材のプロで、振動に関わる数多くの素材を知り尽くす人。「全ての楽器に命が宿る」をコンセプト

職人達の音作りの思想や個性が見えてくると インシュレーター選びはもつと面白くなる

に、8種類の素材をブレンドし、精度と形にこだわりぬいたKaNaDeシリーズを開発している。声や楽器の周波数を元にチューンしたアイテムは前代未聞だ。配合やサイズを変えることで、積極的に再生音をアレンジできることがこれまでに例のない特徴。精度はマイクロレベルで、スタンダードのほかワイドやアソソンなどのバリエーションも発売される。

フローティングタイプにも 個性的な作り手が揃う

一方フローティングタイプはど



TAOCの鑄鉄作業現場の見学に向かう筆者と、開発を手がける岩田博さん



金井製作所のインシュレーター製造の工場。何度も試作を繰り返し音質を追い込んできた

うだろう。こちらにはジークレフ音響の永田良二さんがいる。ウェルフロートと呼ぶ、バネ成分のある金属からワイヤーで吊った吊り構造だが、上下はリジッドで水平方向のみフラフラというもの。機器を浮かせてストレスから解放するため、ストレスが消えた伸びやかさや自然さが音の特徴だ。スピーカーでのデモを聴いたが、ピアノの調律音を検知できるレベル。学者肌の職人と言える。

もうひとつ、ウインドベルも忘れてはいけない。特許機器という振動対策のエキスパート集団で、丸

山照雄さんのチームが開発を手がけたもの。基本はコイル状バネだが、被さったスリーブが高周波数で共振する風鈴効果によって、さらに音質を向上させるという。オーディオ用ではあるが、音楽の魂を持ったアイテムといえるだろう。これは一例だが、こうした音づくりの思想なり作り手の個性、音の傾向などがみえてくると、「さあインシュレーターを選ぼう」というときの指針になるだろう。これをヒントに、今回、選定試験した世界各国のインシュレーター20モデルを評価するきっかけとなれば幸いだ。